フロムによるフロイト「修正」の含意
――アドルノのフロイト修正派批判を手がかりにして――

森田　一尚

1．はじめに

「楽観主義のもっとも説得的で人気を博した唱導者は、エーリッヒ・フロムである」(Hughes 1975: 195)。フロムには「人類の情緒的な罠についてのアドルノ、ホルクハイマーの――さらにはフロイトの――悲劇的感覚はおよそ認められない」(196)。社会思想史家のスチュアート・ヒューズは、『大変貌（*The Sea Change*）』のなかでこのようにいう。フロムの『自由からの逃走』や『愛するということ』などの著作を念頭におけば、ヒューズのこの解釈も的外れではないように思える [1)]。フロムについての知的伝記を公刊したローレンス・フリードマンも、フロムが「精神分析家や学際的な学者、あるいは歴史家というよりは、自由に活動する社会評論家（social commentator)」(Friedman 2013: 99) として『自由からの逃走』を執筆したと語っているし、また 1950 年代には、彼が「アメリカの学問界での名声を低下」させていたことを指摘している (184)。したがって伝記的な理解においては、今日でも「悲劇的感覚」を欠いた「楽観主義」者としてのフロム像は、受け入れられるのかもしれない。

しかし従来の研究は、フロムが「楽観主義」的とされる議論を展開するに至った理論的契機と、それと不可分である彼のフランクフルト学派からの離脱について、十分に論じてこなかった。そのためフロムの理論のどの側面が「楽観主義」的であり、それがアドルノやホルクハイマー、さらにはフロイトの理論と対比させたとき、いかなる観点から批判されるべきなのかが必ずしも鮮明になっていなかった [2)]。そのことは単に、フロムがかつて属していたフランクフルト学派に関する研究において問題であるだけでなく、その学派に属していた思想家たちを教育思想家として捉える教育哲学・教育思想研究にとっても問題だと言えよう。そこで本稿は、フロムを教育思想家と捉え、彼の思想の教育学的含意を引き出そうとする研究の一環として、フロムと彼の批判者であったアドルノの思索に焦点を当てるのである。

フロムは 1933 年にアメリカに渡った後、コロンビア大学に移された「社会研究所」（いわゆる「フランクフルト学派」の面々が集った研究所）に勤めていた。しかし 1938 年頃、彼は当時所属していた「社会研究所」から「破門」(徳永 1974: 213) された。その理由は徳永恂 (1986) によれば、「アドルノとの対立であり」、とりわけ「フロイト解釈 [……] に関して、ホルクハイマーがフロムからアドルノに乗り代えたこと [……] が、決定的だった」(180)。いいかえるなら、フロイト解釈に関して、フロムとアドルノ、ホルクハイマーが対立したことが原因だというのである。この解釈は近年まで受け入れられており、たとえばニール・マクラフリンは、フロムがフランクフルト学派の批判理論研究のなかで軽視され、「忘れられた知識人」となった原因の一つに、アドルノとホルクハイマーの理論が学派の「起源神話」となったことを挙げている (McLaughlin 1999: 113)。しかし、これまでのフロム研究は、いくつかの例外を除いて、アドルノとフロムの関係性を十分に比較検討してこなかった。

ところが 2000 年代以降に発表されたフロムを中心に据えた思想研究は、両者の関係性を重視している。たとえばヨアン・ブラウンは、アドルノとホルクハイマーの思想が学派の「起源神話」となったという見方を継承したうえで (Braune 2014: 5)、フロム思想の特質をアドルノ、ホルクハイマー、マルクーゼらの諸概念と対比させながら論じている。さらにマクラフリンのフロム評価に同意するキーレン・デュルキンも (Durkin 2014: 9)、近年の論文において、フロムとアドルノの「共通軸」を「西洋マルクス主義」、「精神分析」、そして「大衆文化批判」に認め、それらを共通の関心としつつもそこから両者の理論が分岐していったことを明らかにしている (Durkin 2019)。また国内の研究では、出口剛司が「忘れ去られた一人の思想家」としてのフロム像に言及したうえで (出口 2002: 2)、「アドルノ＝ホルクハイマー」、そしてスピノザとの関係からフロム思想の意義を社会学的かつ社会

 ©2019 The Author

思想史的に明らかにしている。出口の試みは、フロムにおける「亡命」の重層的な意味を深く読み込んだ先駆的な試みである。彼はフロムにとって「「亡命」とは、「啓蒙の弁証法という権力＝権能に対する異議申し立ての〈力〉によって指定される「文体の概念」であり、フロムの身体と思想とに、同時的に反復する〈力〉の表現」(106) だと指摘し、「亡命」後のフロムの倫理学がスピノザ倫理学の影響を受けた「自然的理性」の「力」を標榜するものであることを明らかにした。そしてこのフロム思想の変貌を、「啓蒙的理性の自己反省」へと向かったアドルノ＝ホルクハイマーの思索と対比させて論じた。つまりフロムは、アドルノ＝ホルクハイマーと同様、「理性による自然支配」、そして「啓蒙の弁証法」という問題について共通認識を持っていたのだが、この問題に対する思想上の応答が異なっていたことを出口は指摘したのである (出口 2002)。

これらの研究は、いずれもフランクフルト学派の思想圏との対照を意識しており、その観点からフロム思想の独自性を描こうとしている点で一致している。この視座は重要であり、フロムがフランクフルト学派研究から忘却された一原因が学派からの離脱であったことを考えれば首肯できる。しかしいずれの研究も、フロムの思想と理論の独自性を浮き彫りにすることが目指されるために、フロムの理論がフランクフルト学派の「起源神話」とどう対峙しえたのか、具体的にいうなら、フロムの理論が数々の批判的言説にどう応答しえたのか、という点にまでは議論が及んでいない。

そこで本稿は、まずフロムの理論に対する重要な批判を再検討することにしたい。その批判とは、アドルノが論文「修正された精神分析」のなかで展開したものである。同論文でアドルノは、フロイト修正派の理論家、とりわけカレン・ホーニィの議論を取り上げ、徹底的な批判を行った。しかしこの論文は、ホーニィの所説を引用しつつも、実質的にはフロムにも向けられたものと考えられる [3)]。したがって同論文におけるフロイト修正派批判を検討することは、フロムの理論の可能性を展望する上で大切な作業となるはずである。ブラウン、デュルキン、出口の研究においては、この論文への言及が見られない。したがって本稿は、まず２節で、従来の否定的なフロム評価が暗黙のうちに依拠していると思われるアドルノによる批判論文「修正された精神分析」に焦点を当て、フロムの理論の欠点と目される諸点を洗い出す。同節で明らかになるのは、アドルノの諸々の批判が、修正派によるリビドー理論の軽視に根源的に向けられているということである。同節では、「修正された精神分析」を検討した先駆的な試みとして田中毎実 (1979) の試みが参照される。しかし田中の研究も、フロムの側からの再批判が構成されていないという点で課題が残されている [4)]。次に３節では、フロムのリビドー理論の解釈を検討し、彼がいかなる観点からフロイトのリビドー理論を批判したのかを確認する。４節では、リビドー理論批判にもとづいて行われたフロムによるフロイト「修正」の含意を明らかにする。そして５節では、フロムのフロイト「修正」の基礎をなす人間理論を確認し、彼の治療実践に関する理論が検討される。最後に本稿は、フロムの「修正」理論がアドルノの批判にどう応じえたのかを整理する。

２．アドルノによるフロイト修正派批判

アドルノによるフロイト修正派批判の批判点は多岐にわたっている。それらを検討した田中毎実（1979）によると、それは五つの点に整理できる。すなわち、①修正派が精神分析の理論と治療実践との間の分裂を、理論が治療に吸収され解体されるという形で解消している点 (62)。②修正派が「性格」概念を実体化し、「全体的性格」なるものを想定している点 (62-63)。③修正派の理論が社会と個人の「交互作用」という枠組みを前提にしている点 (63)。④修正派が分析を加えずに道徳的理念を持ち出し、分析を「昇華」している点 (63)。⑤修正派が幼児期の重要性を否定し、フロイト理論の「反復強迫」という把握を否認する点 (64)。これらが修正派に対するアドルノの批判だと田中はいう。

以上、五つの批判点は、それぞれを連関させ、合理的かつ統合的に解釈されることを拒むように見える。しかし以下で確認するように、アドルノの批判の矛先は修正派がフロイトのリビドー理論を軽視したことに集中的に向けられており、彼は修正派理論の諸々の問題点も、修正派がリビドー理論を軽視したことによる帰結とみなしている。本節ではこのことを明らかにするために、改めてアドルノの批判点を整理したい。

論文の冒頭、彼は次のようにいっている。

ここ 25 年ばかりの間、精神分析において目立つことがある。それは無意識の隠れた機制を軽視して、意識の側から取付きのいい社会的ないし文化的な方面の動機づけに、従来よりも決定的な役割を認めようとする傾向である。精神分析の社会学化とでも呼べるような目標が目指されているのである。フロイトに対しては、社会的、経済的な構造を心理衝動の単なる作用結果とみなし、さらにこの衝動の源として、多かれ少なかれ没歴史的な人間の欲動的体質を考えていたということで非難が浴びせかけられる。(Adorno 1962: 94=92)

「無意識の隠れた機制を軽視」し、その代わりに社会的、文化的要因を重視する傾向。これが修正派理論の欠陥である。アドルノによれば、「真の科学はひたすら社会的要因と心理的要因の交互作用 (Wechselwirkung) に注目すべきであり、したがって個人内部の原子的に孤立した欲動力学よりも、生活過程の全体が分析の対象になるべきだ、という結論の出てくることに問題がある」(94=92-93)。「フロイトのリビドー理論」を「欲動心理学的」なものとして解釈するアドルノからすれば (95=94)、「欲動力学」よりも「社会的要因と心理的要因の交互作用」を重視する修正派理論は、「精神分析の社会学化」を端的に特徴づけるものである。

アドルノは、社会と心理、あるいは社会と心理的な個人の「交互作用」という修正派の枠組みを、「心理学的観点」と「社会学的観点」の二方向から批判する（Adorno 1962: 100=100; 田中 1979: 63)。心理学的にみるなら、この「交互作用」の枠組みは、「自我」を「あらかじめ与えられたもの」と捉え、その「自我」に後から「外界の足形が押しつけられる」ことを仮定していることになる（Adorno 1962: 100=100)。また社会学的にみるなら、「個人のみならず、個人性のカテゴリーそのものがすでに社会の産物であること」を見落としていることになる (100=100-101)。つまり修正派の「交互作用」の枠組みにおいては、自律的な個人が安易に前提され (100=100)、「まず個人を社会過程から切り取り、ついでこの過程の影響作用を記述」(100=101) することが試みられる。するとそこには「自我心理学」と同様の傾向性 (104=106)、つまり「素朴な個人主義」(100=100) がはっきりと顔を出す。そのため修正派は、フロイトが考える「自我」の発生そのものに関わる「内なる歴史性とでも呼べるようなもの」への分析をも犠牲にしてしまう (Adorno 1962: 96=95; 田中 1979: 63)。

このような修正派理論に対しアドルノは、「フロイトの最大の功績」とは、「こころ (Psyche) の有機的な構造という神話を打破した」(98=98) ことにあるという。「分析的な社会心理学は、個人の内懐深く隠されたメカニズムに探りを入れ、そこに社会の決定的なもろもろの力を暴き出すことに努めなければならない」(100=101)。もしリビドー理論を軽視し、したがって「欲動力学」を廃棄するなら、フロイトの「功績」は毀損される。このアドルノの批判は、彼が修正派の性格理論に対して自らの性格理論を語りだすとき、一層鮮明になる。

「フロイトの欲動心理学に対する論難は、そのもっとも重大な帰結として、精神分析理論の核心をなす、幼児回想の中心的役割というものを否定」することに繋がる (97=96)。個人の性格とは、「幼児生活の孤立した体験」(98=98) のなかでの「ショックによる産物」であり、「苦しんだ挙句に常に不完全にしか癒着しない瘢痕のシステム」(97=97) である。このようにアドルノは考える。

個人の内面深く刻まれた傷、つまり「内なる歴史性」の分析を通して露わになる「瘢痕のシステム」として性格を考えるアドルノに対し、現在の社会や文化、総じて環境一般が性格形成に及ぼす影響を重視する修正派。アドルノはこうした修正派理論の傾向性が、社会的な適応を鼓舞する「体制順応主義」(102=103) を生むと警告する。修正派の理論家の一人であったホーニィの言説に対し、アドルノは次のようにいう。「ほどほど以上に過去とかかわり合うことに対するホーニィの反感と、適応に同調する彼女の立場は密接に関連している。彼女は確実な、現に手づかみにできるような事実以外のすべてを厄介払いしたがっている支配的な風潮と、結託している」(106=108-109) と。リビドー理論を軽視することで「素朴な個人主義」が生まれ、その結果、個人の内面に刻まれている過去の傷が見過ごされ、現行の社会や体制に順応する理論的傾向が生まれる。アドルノは改めてフロイト理論の「欲動心理学」の意義を強調することで、適応主義的な理論が修正派から生じる原因を見定めている。

フロイトが一方において性欲 (Sexualität) を中心題目としながら、反面では性タブーに従いつづけたという事実は、単なる論理的誤謬などではなかった。それは、快楽と禁制が機械的に分けて見られるものでなく、

 ©2019 The Author

相互に制約されたものであるという客観的な事実に対応しているのである。(107=110)

フロイトの「精神分析は、一方ではリビドーをこころの真の現実とみなし、満足を肯定的なもの、その挫折を、発病の因になるところから、否定的なものと考えている」(110=110)。「他方ではしかし、こうした挫折を強いる文明を、[……] 諦めてそのまま受け容れている」(110=110)。それは矛盾である。フロイトの精神分析理論は、それ自身が導出した洞察をその治療実践において結実できないでいる。つまり、精神分析はその内に理論と実践の分裂を抱え込んでいる（田中 1979: 62)。しかしアドルノは、分裂を露呈させているフロイトの理論を「単なる論理的誤謬」と解するのではなく、むしろ彼の理論が分裂を放置していることに意義を見出す。「フロイトの偉大は [……] 矛盾を未解決のまま放置し、事態そのものが内に相克をはらんでいる場合に、あえて体系的な調和を求めようとしなかったところにある」(111=111) からである。

他方、修正派の理論はどうか。彼らは「矛盾を未解決のまま」にあえて「放置」したフロイトとは対照的に、「個人の私的存在と社会的存在の間にはらまれる敵対関係を精神療法によって治すことができる」(107=107) としている。そのような主張ができるのは、リビドー理論を軽視し、代わって「交互作用」論を持ち出し、同時に「素朴」に「個人」を前提することで個人の内面を深く捉えることに失敗しているからである。アドルノからしてみれば、こうした修正派の理論は、フロイトの「妥協の知らないペシミズム」(108=112) の意義を骨抜きにした「楽観論」(98=98) ということになろう。

ここまで本節では、アドルノによるフロイト修正派批判の批判点を整理し、その批判の矛先が、第一に修正派によるリビドー理論の軽視に向けられていることを明らかにした。アドルノの見立てでは、リビドー理論の軽視は、修正派が「交互作用」論によって個人と社会の関係を捉えることを可能にした。しかしそれは彼らが「素朴な個人主義」を前提に理論を構築したことを意味する。結果として修正派は、個人の内面の傷、つまり「内なる歴史性」の分析を犠牲にした。そのことは彼らが幼児期の役割を軽視することにも反映されている。リビドー理論に代わって持ち出される「交互作用」論は、フロイトがリビドーの満足を妨げる文明を「諦めてそのまま受け入れ」たことも無視する。結果、修正派の理論は、精神分析理論とその治療実践との間に不可避に生じる分裂を擬似的に解消してしまうのである。以上、これらのアドルノの批判点は、田中がまとめた①（＝修正派が精神分析の理論と治療実践との間の分裂を、理論が治療に吸収され解体されるという形で解消している点)、③（＝修正派の理論が社会と個人の交互作用という枠組みを前提にしている点)、⑤（＝修正派が幼児期の重要性を否定し、フロイト理論の「反復強迫」という把握を否認する点）の三点に触れている。

では田中が挙げた②（＝修正派が「性格」概念を実体化し、「全体的性格」なるものを想定している点）と④（＝修正派が分析を加えずに道徳的理念を持ち出し、分析を「昇華」している点）についてはどうか。

本節の議論に即せば、②と④の批判点は、修正派が「素朴な個人主義」の前提に立ち、「内なる歴史性」を分析することに失敗したこと、つまり、個人の内面における過去の傷を軽視したことに起因するだろう。もし幼児期を通じて個人に加えられる衝撃を軽視しないなら、「性格」概念を実体的に措定することはできず、ましてや「全体的性格」なる調和的概念を仮定することにもならないはずである。そしてもし内面における傷を見逃さないなら、非「性」化された道徳的理念は語りようもない。分析を「昇華」することは原理的にできないはずだからである。したがって田中が挙げた②と④の批判点は、③と⑤の批判点から導出しうるものだと言える。

しかし、アドルノの論文全体を振り返ってみるなら、②と④の批判点から暴きだされる修正派理論の諸問題は、③と⑤の批判点というよりも、修正派がリビドー理論を軽視したことに根源的に起因する。先に指摘したように、③と⑤の批判が生まれるのは、つまるところ、修正派がリビドー理論を軽視したことにあるからだ。このことから、田中が列挙したアドルノによる①〜⑤の批判は、修正派がリビドー理論を軽視したことの帰結として考えることができる。したがって次に 3 節では、フロムがリビドー理論をどのように理解していたかを明らかにし、4 節では③と⑤に関わる批判を、そして 5 節では①に関わる批判をフロムの理論に即して扱うことにする。本稿では②と④の批判点の検討を行わないが、それは本節で指摘したように、それらの批判点が③と⑤の批判点から導出されうるものだからである。

3．フロムのリビドー理論に対する批判

前節までに、アドルノの修正派批判の批判点が確認された。複数の批判点は、修正派によるリビドー理論の軽視に根源的に向けられるものであった。そこで本節は、フロムによるリビドー理論の解釈を検討する。フロムは「社会研究所」を去った後、マルクーゼとの論争は別にして、公にフランクフルト学派の思想家と相対することはなかった。しかし晩年の作品『破壊――人間性の解剖』の注釈で、僅かではあるもののアドルノの仕事に言及しており（Fromm 1973: 105n, 326-327n）、決してアドルノに無関心ではなかったことが窺える。したがってフロムのフロイト「修正」の含意を明らかにすることを目指す本稿においては、まずフロムがフロイトのリビドー理論をどのように解釈し、批判したのかを検討すべきであろう。

フロムはフロイトの理論との差異を次のように語っている。

> ここで提示された性格理論とフロイトの性格理論の違いは、性格の主要な拠点がさまざまなタイプのリビドー組織にみられるのではなく、人間が世界に関わりを持つ際の具体的な仕方にみられる、ということである。（Fromm 1947: 58）

これはアドルノからすれば、明らかにリビドー理論の軽視であり、それに代わって環境要因を重視していると読まれるはずである。フロムの性格理論は、確かにアドルノが批判したように、リビドーに代えて環境要因を重視するものである。しかし、フロムの理論において注視されるべきは、彼が性格理論を構築するにあたって環境要因を重視するようになった理由であろう。本節の議論を先取りするなら、彼は決してフロイトのリビドー理論の意義を否定したのでなかった。そうではなく、フロイトの思考様式が当時の「唯物論」的思考に依拠していたことを批判したのであった。フロムは次のようにいっている。

> フロイトはフォン・ブリュッケの考えと、一般的なブルジョワ的唯物論の考えに強く影響されていた。この影響のもとでは、特定の生理的根源を明示しえない強い心的な力 (powers) がありうると考えることはできなかった。／フロイトの真の目標は人間の情念 (passions) を理解することであった。 [……] ／彼はいかにして問題を解決したのか。こころ (psyche) に及ぼすホルモンの影響については比較的わずかしか知られていない時代であったが、生理学的なものと心的なもの (the psychical) との結びつきがよく知られている現象がたしかに一つはあった。すなわち、性愛 (sexuality) であった。(Fromm 1980: 5)

フロムの解釈によれば、フロイトは「人間の情念を理解すること」を目指したのだが、そのために彼が依拠したのは、当時の唯物論であった。唯物論的思考は心的な力に対応する生理学的根源を求めざるをえない。「したがって、このタイプの唯物論によって基本的な哲学的志向を作りあげたフロイトは、「リビドー」のうちに人間の情熱の生理学的基礎を見出したと信じた」(Fromm 1955: 70)。

フロイトの思想に浸透するこの時代的制約を、フロムは取りはらおうとする。フロイトが「人間それ自体の状況を記述するに際して、ブルジョワ社会の人間関係が大多数の人びとにとっても当てはまると考えた点には問題がある」(Fromm 1970: 45, 傍点原文）からだ。フロムはフロイトのエディプス・コンプレックスの解釈において、この時代的制約が色濃く反映されている点を次のように指摘する。

> フロイトの幼児性愛の理論を用いるなら、男の子を母親に結びつけるものは、母親が男の子の人生における最初の女性であるという事実である、と仮定したのは論理的に当然であった。[……] 母親が男の子にとって愛情の対象であるだけでなく、性的欲望 (sexual desire) の対象であるという証拠は豊富にある。しかし――ここにフロイトの大きな誤りがあるのだが――子ども時代のみならず、おそらくは一人の人物の全生涯にわたって、母親との関係をそれほど強固で不可欠なものとし、母親像をそれほど重要なものとするのは、性的欲望ではない。この強さはむしろ、私が今しがたのべた楽園的な状態への欲求 (need) にもとづいている。

 ©2019 The Author

(Fromm 1980: 29)

フロイトは当時の唯物論を土台にしてリビドー理論を用い、母親への子どもの「付着 (attachment)」を説明しようとしたのだが、それを性的な現象として解釈するせいで、「子どもが保護され、愛され、しかもいかなる責任も担う必要がないという状況」に「憧れ」を抱く点を見落とした (28)。フロイトは「母親への男の付着と、母親を失うことへの恐れを明らかにした」(30) のだが、「それを性的現象として説明することによって歪曲してしまった」(30)。フロムはこのように指摘する。

「人 (man) は常に二つの力 (forces) に引き裂かれている」(Fromm 2017 [1957]: 97)、とフロムは 1957 年にニュースクールで行った講義でいっている。一方で、「人 (he) は確実性と保護を欲し」(97)、他方で、「人はその力の中で成長し、思い切って外界に出ようとし、自分自身になろうとするのです」(97)。

フロムは人間のうちに存する「二つの力」の「両極性」(90-91) を重視する。その枠組みにおいては、「両極」のうちの一つの極が、「楽園的な状態」に憧れをもつ人間一般の志向だということになる。母親に「付着」しようとする男児の志向は、男女の別なく人間一般に認められる「欲求」なのである。

> フロイトはその生理学的関心のなかで、いっそう重要な性の側面をみませんでした。つまり性的欲望 (sexual desire) とは、何よりもまず緊張を取り除きたいという願望 (wish) なのではなく、それは男性性と女性性の両極性、すなわち植物や動物界、そして人 (man) などのすべての自然に流れ込む男性性と女性性の両極性に元来関係しているのだ、ということをみなかったのです。でもそれは全ての生き物 (living substance) の最も基礎的な両極性の一つなのです。(90-91)

フロムの批判の眼差しは、フロイトのリビドー理論に向けられていることには違いないのだが、その批判の核心は、フロイトがリビドー理論を通じてなしえた発見が、彼の「哲学」である唯物論に阻まれ、十分に人間一般の理解に適用されなかったことにある。フロムは念を押すように、「中心的な問題はフロイトが性を強調しすぎたことではなく、彼が性を極端に表面的にみていたことにあるのです」(93) 、という。

したがってフロムのフロイト批判は、彼の立場からすれば、リビドー理論を否定するための批判というよりは、その理論の発見によって切り拓かれた地平を歪みなく捉えるための肯定的な批判であったと言える。彼はフロイトのリビドー理論を軽視したのではない。むしろその発見の重要性を認め、その理論が有する可能性をフロイトの時代的制約から解き放とうとするのである。

以上のように、フロムによるリビドー理論の解釈を検討してみるなら、そもそも彼がリビドー理論を軽視したとする見方は、決して彼の理論に相応しいものではないことがわかる。とはいうものの、本節で論じたフロムの解釈をアドルノの批判に対置させたところで、前節までに提示した批判点に答えたことにはならない。アドルノの観点からすれば、フロムがリビドー理論に代えて環境との「交互作用」から性格を理解することは、フロイト理論の意義を骨抜きにするものだからである。そこで本稿は、アドルノの批判に応じうるフロムの理論を提示するために、次にフロムにおけるフロイト「修正」の意味を具体的に検討する。

4．フロムによるフロイト「修正」の含意

リビドー理論に代わってフロムが指し示すのは、環境要因ないし社会要因を重視して個人の性格を分析する道である。それはアドルノからすると、自我心理学と同様、「素朴な個人主義」を前提にしていることを意味する。そこで本稿が問題とするのは、フロムは確かにリビドー理論ではなく環境との「交互作用」から性格を理解しようとするのだが、そのときフロムの理論が、「素朴な個人主義」に陥っているのか、ということ、さらにその「交互作用」論の枠組みにおいて、「内なる歴史性」の分析が犠牲にされているのか、ということである。本節ではこの二点を検討することを通して、フロムによるフロイト「修正」の含意を明らかにしていきたい。

まず考察されるのは、フロムの理論が、自我心理学と同様、「素朴な個人主義」に陥っていたのか、という点で

ある。フロムは自我心理学の「自我」の捉え方について、次のようにいっている。

> ハルトマンやそのグループは、フロイトを正確に引用し、彼を自我心理学の父として打ち立てるものの、フロイトを父とする彼らの主張は必ずしも正当であるとは思えない。フロイトは自我に対する関心を次第に強めたが、彼の分析的心理学は依然として行動を動機づける無意識的な欲動 (unconscious drive) を中心にしたままであったし、この理由のために、フロイトはずっと「イドの心理学者」のままだったのである。(Fromm 1970: 33)

修正派が「無意識の隠れた機制を軽視」すると想定したアドルノに反して、フロムはここでフロイトを、「無意識の欲動」を重視する「イドの心理学者」だとみる。そしてその観点から、自我心理学の理論枠組みを批判する。この解釈はフロムの精神分析理論における他の言説と重なっている。彼は 1964 年に行った講演のなかでも次のように述べている。

> フロイト派がいうところの自我機能について論じることが、今日では流行っています。私にとってそれはお粗末な撤退です。[……] というのも、性的な意味での欲動 (instincts) の帰結ではない精神的機能がいくつもあるなどということは、フロイト正統派の外に出れば、疑いようもない事実なのですから。自我を強調するこの新しい傾向に触れて私が思うのは、フロイトの思考のなかのもっとも価値あるものからの撤退、つまり情念を強調する思考からの撤退が起こっているということです。(Fromm 1994: 21)

そしてフロムは続ける。

> これこそ私が提案したいと思うフロイトへの修正です。つまり、自我対情念の闘いが中心問題なのではなく、あるタイプの情念が別のタイプの情念に闘いを挑むということが中心問題なのだ、と。(21, 傍点原文)

フロムは「自我を強調する」理論に反対する。このことから示唆されるのは、彼が「素朴な個人主義」に陥ってはいないということである。もちろん「自我」と「個人」は同一のことを意味しない。しかし、情念同士の闘いに注目するフロムは、一個の実体としての「自我」をあらかじめ想定するわけではない。「自我は本質的に情念の執行者」(21) にすぎない。アドルノは、修正派が「自我」を「あらかじめ与えられたもの」と考えている点に「素朴な個人主義」をみたわけだが、フロムの力点は、情念同士の闘いに置かれており、「自我」は情念同士がせめぎ合う場として捉えられるだけである。その視座からすれば、フロムが「自我」を所与のものとして想定していたとは言えない。それゆえアドルノの指摘する意味で、フロムが「素朴な個人主義」に陥っていたとする見方も正しいものとは思われない。

このように「自我対情念の闘い」を重視する自我心理学に対し、フロムは「人間を突き動かす情念がいかなる種類のものであるか」(21) という点を強調する。もちろんその情念は、リビドーに還元されるものではない。人間は、「力、愛、破壊などを渇望したり、宗教的、政治的、または人間主義的理想のために命を危険にさらしたりする」(Fromm 1947: 46)。こうした現象は、リビドー理論によって性格を把握する限り、説明しきれない。だがフロイトは、「人間の情念的希求 (man's passionate strivings) の大部分が人間の欲動 (instincts) の力によっては説明されえないという事実を否定」した (46)。フロムはこのようにいう。したがって彼は、情念の表出に着目することで性格を理解しようとするのである。

> 個人が自分自身を世界に関係づける、そうした構え (orientations) が彼の性格の中核となっている。性格とは、同化と社会化の過程において人間のエネルギーが見出すはけ口の（比較的不変な）形であると定義することができる。(59, 傍点原文)

 ©2019 The Author

「人間のエネルギー」とは「心的エネルギー」(59) のことである。そのエネルギーの表出を心的現象として捉えた場合、それは「情念」と言い換えることができるだろう。フロムはここで、性格とは過去に被った「ショックの産物」だと解するアドルノとは異なり、現在に焦点を当て、情念が表出される仕方に着目する。性格とは、今、その人間を突き動かす情念を調べることで、「(比較的不変な) 形」として理解される。フロムはこのように考える。

しかしすぐさま、アドルノは言うだろう。つまり、フロムは個人の内面における「内なる歴史性」への分析を蔑ろにしているのではないか、と。この点に関してフロムは、間接的にではあるが答えている。彼は晩年、自らの治療方法を説明したとき、次のように語った。

> 患者が 17 歳の時の 30 年前の出来事が夢のなかに登場することだってあります。しかし私の目標は症例史研究 (historical research) ではありません。私は、今、無意識的になっている事柄の明瞭な気づきを目指します。ただこの目標を達成するために、多くの場合、もしかしたらほとんどの場合に必要となってくるのは、幼児期や青年期にその患者が体験したことを調べることなのです。 (Fromm 1994: 57-58)

フロムは「内なる歴史性」を分析することの重要性を否定しない。しかし、「幼い頃の出来事は人格 (person) を決定するのではなく、人格をどこかに向かわせる (*incline*)」(57, 傍点原文) のだと語り、一定の留保をつける。「幼児期の体験は確かに重要」(58) なのだが、「それはあくまで追体験され、想起される限りにおいての重要さ」(58) である。「人格」を「どこかに向かわせる」過去の出来事を「因果論的」(58, 傍点原文) に、あるいは「発生論的で症例史的」(58) に探求したところで、「いかなる治療的価値もない」(58)。「ある事柄がなぜ起こったかが分かっても、それだけでは何も変わらない」(58, 傍点原文)。フロムはこのように主張する。

だからこそ、今、その人間が突き動かされている情念に彼は注目する。そしてその情念が、患者のうちで今、「想起される」ことを期待する。以上のようなフロムのフロイト「修正」は、果たしてアドルノの批判に応じうるに相応しい理論になっているのか。本節の最後に、議論をまとめておこう。

本節では、フロム自身が語るフロイト「修正」の含意を確認することで、アドルノが修正派に対して行った批判にフロムの理論がどう応じえたかを検討してきた。フロムのフロイト「修正」とは、「自我」を所与のものと仮定し、「自我対情念」を強調する思考から、対立する情念同士の「闘い」を重視する思考への転換を意味する。本節ではまず、フロムの「修正」理論が、決してアドルノが言う意味での「素朴な個人主義」を前提にするものではないことを明らかにした。次に本節は、フロムの「修正」理論において、幼児期がいかなる仕方で扱われていたかを確認した。そうすることで、フロムが「内なる歴史性」への分析を決して蔑ろにしていたわけではないことを明らかにした。

しかし本稿のここまでの議論では、理論と治療実践の分裂を解消したとするアドルノの批判に十分応じえていない。その批判点は、田中の指摘によれば、最も包括的な批判点である (田中 1979: 62)。したがって次節では、フロムの理論の「基礎」を確認することでこの点を検討してみたい。

5．フロムの人間理論

フロイト「修正」の背景には、フロムの人間理解が潜んでいる。彼はリビドーに「人間の情熱の生理学的基礎」（Fromm 1955: 70）をおいたフロイトに対し、自らの理論の基礎 (substratum) を次のように説明する。

> その基礎は身体的な基礎ではなく、世界や自然や人間との相互作用における人間の全体的なパーソナリティである。つまり、それは人間的実存の諸条件から生じる、生活の人間的な実践である。(70, 傍点原文)

フロムの理論は「人間的実存の諸条件」をもとに成立している。彼は人間の実存的状況を「実存的二分性 (existential dichotomy) 」(Fromm 1947: 41) という用語で説明する。人間の実存は理性によって二分されてい

る (40-41)。すなわち、「理性は [……] 動物的存在を特徴づける「調和」をいったん断ち切った」(40)。この意味で理性は「人間の栄光」(40) である。しかし依然として、「人間は自然の一部であって、その自然界の法則にしたがい、そのような法則を変えることはできない」(40)。しかしそれでいてなお、理性によって人間は、「それ以外の自然を超越する」(40)。

理性によって不可避にもたらされる「内なる破れ」が「実存的二分性」である。「人間はこの内なる破れを克服するために駆り立て」られる (41)。しかし、「二分性は人間が無効にすることができない矛盾」(41) である。だがそうであるにもかかわらず、解決不能な二分性を解決しようと人間は欲する。そのとき人間は、「性格や文化に応じて、種々の仕方で」実存における矛盾に「応答」(41) するのである。それは性的な欲求が満たされたところで解消されるものではなく、むしろ生きている限り、たとえ無意識的ではあっても直面せざるをえない矛盾である。

人間は文字通り、「人間本性 (human nature) 」(20-24) として、自然と共にある。自然の一部である以上、人間はその理性をもってしても自然界の法則を根本的に変えることはできない。しかし限定的にではあるが自然を乗り越えることはできる。フロムの解釈にしたがえば、人間は自然を超越する可能性と不可能性の間を揺動する存在だということになる。

しかもそのことに私たちは気づいているのだ、とフロムはいう。彼は「最も基本的な実存的二分性とは、生と死の間のそれである」(41) と語ったすぐ後で、「人間の生が死で終わる」ことを「悲劇的な事実」であると捉え (41)、さらにその「悲劇」の内実を次のように語っている。

> 偶然の点に始まり偶然の点に終わる人間の生は [……] 個人が自らのあらゆる潜勢力を実現しようとする要求と悲劇的に対立する。何を実現することができるかということと、実際に何を実現するかということの間のこの矛盾を、人間は少なくとも、漠然と知覚している。(42)

ここでフロムが「悲劇的」だと言っているのは、単に実存的二分性に発する矛盾のことではない。知識で立ち向かうことのできない死の事実を「漠然と知覚」していることが「悲劇的」だと言っている。人間は自らの実存が孕む二分性に対し、何らかの「応答」をせざるをえないのだが、その「応答」が人間の生における恒久的な解決にはなりえないということを「漠然と」ではあるが「知覚」している。そうであればこの「知覚」は、単に実存的二分性が露呈させる「矛盾」の「知覚」にとどまらない。それは外界といかなる関係を取り結んでも、かつて自分たちのものであった自然との調和を取り戻せないことの自覚である。その自覚ゆえに人間は、「実存的二分性」の解消へと駆り立てられるわけだが、そのときの「応答」には、はじめから諦念が内在しているのである。

しかし他方で、精神分析家としてのフロムは、「実存的二分性」ゆえに人間にもたらされる神経症に対して、精神分析療法でもって応じようとした。彼は次のようにいう。

> 分析的治療とは何かと問われたら、私の考える答えはこうです。精神分析とは、ある人物の無意識的現実を暴露しようとする方法として定義される、そして暴露する過程でその人物は良くなるチャンスが見込まれる、と。フロイトのこの基本的発想が、すべての精神分析家を結びつけており、全員の共通認識となっているのです。(Fromm 1994: 18-19, 傍点原文)

ここで重要なのは、フロム自身が強調した後の文章である。彼はフロイトの基本的な考えに従うのだが、たとえそうしたとしても、患者には回復の可能性がもたらされるだけだと主張する。分析者は、「よき山岳ガイド」のように、「ときどき「こっちの道のほうがいいですよ (This is a better road)」と言ったり、ちょっと押してあげたりするだけ」(37-38) である。分析者は「よりよい」道を指し示す役割しか持たない。しかしそれでもフロムは、「良くなるチャンス」はあると語っている。

フロムの精神分析理論に見られるこの言説は、精神分析家としての彼の厳しさを物語ると同時に、その理論の弱点を示すように思われるかもしれない。彼は「実存的二分性」を解消することは原理的にできないとする理論

 ©2019 The Author

を提示しておきながら、はっきりとその治療実践においては「良くなるチャンス」を語る。それはアドルノの批判に重ねてみるなら、「人間本性」に内在する「実存的二分性」という矛盾を、「精神分析療法によって治すことができる」と宣言したことになるだろう。しかし前節で確認したように、フロムが対立する情念同士の闘いに着目していたことを考えれば、彼は決してその治療実践においても「実存的二分性」が解消されると想定してはいなかったのではないか。というのも、彼は次のように説明するからである。

> 治療の本質とは次のようなものです。つまり患者は、そのパーソナリティの非合理的で古代的な部分に、自分自身の持っている健全で成熟した正常な部分を突き合わせます。そしてこの直面が葛藤を引き起こします。この葛藤によって、ある仮説上の力が活性化されます。健康への希求 (striving for health)、世界と自己のよりよいバランスへの希求が、人の中に実存するという理論を支持するならば仮定せざるをえないような力、それらが葛藤によって活性化されるのです。(28-29)

これまでの議論を念頭に置くなら、ここでフロムが語っている「葛藤」は、根源的には人間の「実存的二分性」から生じる情念同士の闘いによって引き起こされるものだと考えられる。フロムはその葛藤によって露わになる「健康への希求」に、患者たちの「良くなるチャンス」を見込んでいる。確かに患者のうちに「健康への希求」を想定することは楽観的だと言えるかもしれない。しかしフロムが、「健康への希求」を、「世界と自己のよりよいバランスへの希求」と読み替えていることに注目しなければならない。つまりフロムは、「健康への希求」がそれとは反対の力に直面する場面において、「良くなるチャンス」が現れると主張するだけであり、その葛藤自体を引き起こす大元の構造、つまり「実存的二分性」の矛盾が解消されるとは一言も言っていないのである。

この点に着目するなら、フロムの精神分析理論もまた、理論と実践の分裂を保存していることになる。むろん、その分裂は、アドルノがフロイトの理論から見出した理論と実践の分裂とは全く異なるものである。アドルノが言うには、フロイトは、「性的欲動を中心題目」とし、その挫折が神経症の原因になると考えたのだが、他方でその挫折を強いる文明を受け入れた。アドルノはこの矛盾を精神分析療法によって解消しなかったフロイトを称賛した。それに対してフロムは、対立する情念同士の闘いを中心問題にし、情念を人間のうちに発露させる「実存的二分性」に神経症の原因をみたのだが、他方、その二分性は治療実践を施したところで解消されるものではないと考えたのである。フロムはアドルノと議論の前提を共有しないものの、その精神分析理論において理論と実践の分裂を保存していたのである。

6．むすびにかえて

ここまで本稿は、アドルノが「修正された精神分析」で提起したフロイト修正派批判を再検討し、その批判に対してフロムの「修正」理論がどう応じえたかを検討した。両者の関係は複雑であった。それはフロムとアドルノが、もはや同じ地平にたってフロイト理論を解釈していないからである。もちろんアドルノは同じ地平にたっていない点を、すなわちリビドー理論を軽視した点を批判したのだが、本稿で論じてきたように、フロムにはフロイトのリビドー理論に反対しなければならない数々の理由があったのである。

フロムはフロイトの「哲学」が「唯物論」に依拠していたこと、それによって「人間の情熱」がリビドーにあると仮定した点を批判した。だがフロムは「人間の情熱」を理解することを目指したフロイトを救い出すため、彼の理論の時代的制約を取り払おうとした。そこでフロムが代わって持ち出したのが、「実存的二分性」という人間理解にもとづく「修正」理論であった。それはアドルノが指摘するように、リビドーではなく、環境要因を重視する枠組みを有していた。しかしその「修正」理論によってフロムは、所与のものとして「自我」を措定する「素朴な個人主義」に陥ったのではなかったし、分析における幼児期の重要性を否定したのでもなかった。「実存的二分性」は解消できない矛盾である。その理解を基礎におくフロムのフロイト「修正」理論は、神経症の原因が「実存的二分性」にあることを突き止めながらも、その二分性を治療実践によって根本的に解消することは不可能だとみた。フロムとアドルノは、全く異なる前提に立ちながらも、そのフロイト解釈において、ともに理論

と実践の分裂を暴き続けたのである。

註

1) フロムの思想の受容、およびフロムの思想の新たな解釈の可能性については拙稿を参照のこと (森田 2019)。

2) フロムとアドルノの理論的関係を論じたキーレン・デュルキンは、アドルノやホルクハイマー、さらにはマルクーゼによる、フロムの「社会研究所」への理論的貢献の過小評価が、フロムとアドルノの関係を詳細に検討することを妨げている、と指摘している (Durkin 2019: 104)。

3) 田中毎実 (1979) は、アドルノの論文「修正された精神分析」は、「直接には名差されないフロムの理論が、主題であるように思われる」(62) と述べている。

4) 本稿は、田中 (1979) によるアドルノ解釈を否定するものではない。田中の研究においてアドルノの批判に対するフロムからの応答が直接なされていないことを問題とし、それを本稿の課題として引き受けている。

引用文献

Adorno, Theodor. (1962). Die revidierte Psychoanalyse. In M. Horkheimer, & T. Adorno (Eds.), *Sociologica II*. Frankfurt am Main: Europäische Verlagsanstalt. =(2012):「修正された精神分析」『ゾチオロギカ――フランクフルト学派の社会学論集』 (三光長治・市村仁・藤野寛訳) 平凡社

Braune, Joan. (2014). *Erich Fromm's Revolutionary Hope: Prophetic Messianism as a Critical Theory of the Future*. Rotterdam: Sense Publishers.

出口剛司 (2002)『エーリッヒ・フロム――希望なき時代の希望』新曜社

Durkin, Kieran. (2014). *The Radical Humanism of Erich Fromm*. New York: Palgrave Macmillian.

Durkin, Kieran. (2019). Erich Fromm and Theodor W. Adorno Reconsidered: A Case Study in Intellectual History. *New German Critique*, Vol. 46, No. 1, pp. 103-126.

Friedman, Lawrence. (2013). *The Lives of Erich Fromm: Love's Prophet*. New York: Columbia University Press.

Fromm, Erich. (1947). *Man for Himself: An Inquiry into the Psychology of Ethics*. New York: Henry Holt and Company. =(1955) :『人間における自由』 (谷口隆之助・早坂泰次郎訳) 東京創元社

Fromm, Erich. (1955). *The Sane Society*. New York: Henry Holt and Company. =(1958): 『正気の社会』 (加藤正明・佐瀬隆夫訳) 社会思想社

Fromm, Erich. (1970). *The Crisis of Psychoanalysis: Essays on Freud, Marx, and Social Psychology*. New York: Henry Holt and Company. =(1974): 『精神分析の危機――フロイト、マルクス、および社会心理学』 (岡部慶三訳) 東京創元社

Fromm, Erich. (1973). *The Anatomy of Human Destructiveness*. New York: Henry Holt and Company. =(2001): 『破壊――人間性の解剖』 (作田啓一・佐野哲郎訳) 紀伊國屋書店

Fromm, Erich. (1980). *Greatness and Limitations of Freud's Thought*. New York: Harper & Row. =(1980): 『フロイトを超えて』 (佐野哲郎訳) 紀伊國屋書店

Fromm, Erich. (1994). *The Art of Listenin*g. New York: Continuum. =(2012): 『聴くということ――精神分析に関する最後のセミナー講義録』 (堀江宗正・松宮克昌訳) 第三文明社

Fromm, Erich. (2017 [1957]). Freud's Concept of Sexuality. In *Fromm Forum 21/2017: Erich Fromm's Victory Over Social Amnesia,* Tübingen: The Literary Estate of Erich Fromm.

Hughes, Stuart. (1975) *The Sea Change. The Migration of Social Thought, 1930-1965*. New York: Harper and Row. =(1978):『大変貌――社会思想の大移動』(荒川幾男・生松敬三訳) みすず書房

McLaughlin, Neil. (1999). Origin Myths in the Social Sciences: Fromm, the Frankfurt School and the Emergence of Critical Theory. *The Canadian Journal of Sociology*, Vol. 24, No. 1, pp. 109-139.

 ©2019 The Author

森田一尚 (2019)「エーリッヒ・フロムの思想の新たな解釈を求めて――フロムと心理主義、プラグマティズム、アメリカの関係性」『統合人間学研究』第 2 号、pp. 82-96.

田中毎実 (1979)「「逆説的希望」と「自己実現」――フロム・マルクーゼ論争を中心として――」『愛媛大学教育学部紀要 第 I 部 教育科学』第 25 巻、pp. 59-84.

徳永恂 (1974)『ユートピアの論理――フランクフルト学派研究序説』河出書房新社

徳永恂 (1986)「家族と国家――ヘーゲルとフランクフルト学派――」『新・岩波講座 哲学 11』岩波書店

(もりたかずなお　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程)

©2019 The Author